

## 最近のスウェーデンにおける老人福祉サービス ——リディンイエ市のケースを中心に

三上 美美子

社会保障研究所研究員

### はじめに

スウェーデンの総人口は、1980年現在、約830万人である。65歳以上の高齢人口は、このうち16.4%にあたる136万人であるが、2025年には人口の20%（約160万人）に達すると予想されている(1)。スウェーデンの老人福祉に対する需要は、このような人口高齢化にしたがい、その量と質の両面において、ますます増大し変化してゆくものと思われる。その動向は、福祉社会をみざす国にとって、世界中で最も関心をひかれるところのひとつである。

筆者は昨秋、社会保障研究所の海外出張でスウェーデンを訪問し、進歩的な老人福祉サービスについての見聞を広める機会を得た。本稿では、おもにリディンイエ市の例を紹介しながら、最近のスウェーデンの老人福祉サービスの動向についてレポートする。筆者はもとより「老人福祉」についての専門家ではないので、ここで福祉論を展開する意図は毛頭なく、むしろ、政府、自治体および民間の諸機関における訪問記と入手資料に基づいて、スウェーデンの老

人福祉サービスの一端を紹介するにとどめたい。

### 1 スウェーデンの老人福祉サービス

スウェーデンの福祉行政は、州（County Councils）が健康保全および医療を担当し、市（Municipality Councils）が学校教育、児童福祉、老人福祉、住宅、公益事業、文化・余暇活動などの公共サービスを提供している。すなわち、スウェーデンの老人福祉サービスは、医療面を州政府が、その他の福祉サービスを市の自治体が責任を担うというように、機能によって役割分担されている。そして両者が相互にうまく連結し、協力し合うシステムが確立している。

老人福祉サービスの種類は、大きく分けるならば、つぎの3項目に分類される。老人福祉サービス（Service）、老人養護（Care）、および老人福祉特別サービス（Special Service）である。

第一に、サービスというのは、自宅やサービス・ハウス（サービス付き老人用アパート）に住む老人を対象に給食サービス、輸送サービス、身体訓練、デイ・センター

等を含むホームヘルプ・サービスから、訪問看護・治療にまで及ぶものである。訪問看護・治療のサービスは、ホームヘルプ・サービスとうまく結合して提供されるが、医療の機能をもつから、州が責任をもって行う。この訪問看護・治療サービスを受けている患者数は、1980年現在、全国に約4万人である。他方、ホームヘルプ・サービスの方は、政府から費用の35%の援助を得て、市の自治体が提供している。

1980年現在、全国で約30万8千人の老人が、7万1千人のホームヘルパーによって何らかのサービスを受けている。

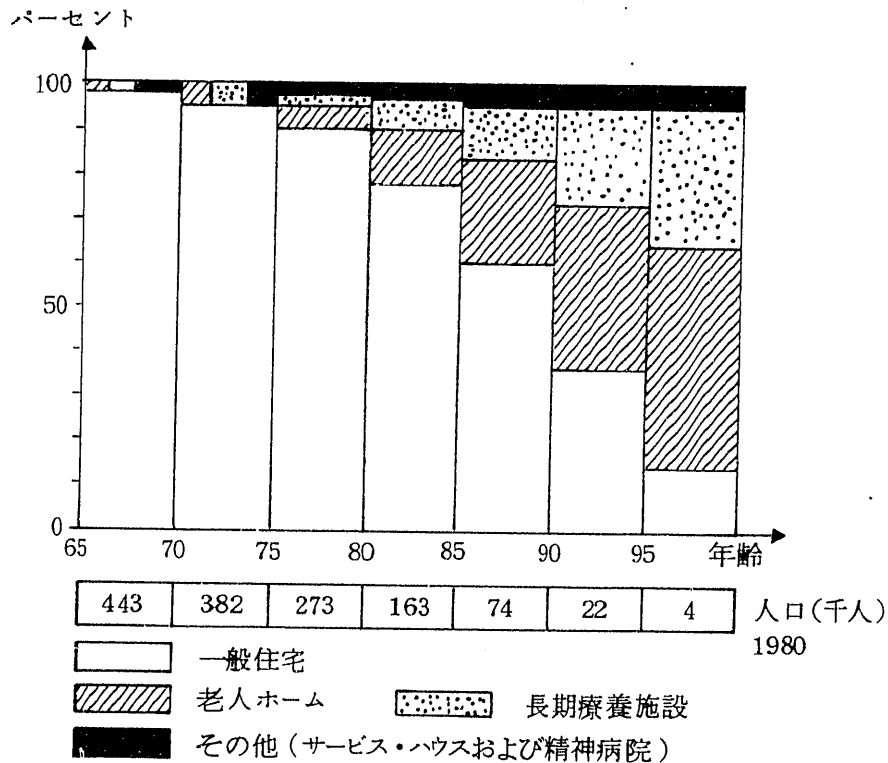
老人養護は、惚けや身体の不自由のため自力で通常の生活を営めない老人を対象に、養護老人ホーム (Old age home) や長期療養病院 (Long term hospital) で24時間のケアを行うものである。寝たきりではないが惚けなどで自活の困難と認められる者は、養護老人ホームに入居することができる。そこでは、個室が与えられ、給食の他に種々の活動、デイ・センターのサービスが提供される。現在、70歳以上人口の7%が、この種の老人ホームに入居している。養護老人ホームは自治体によって運営されており、次節で紹介するリディンイエ市の Siggebogården はその一例である。これに対して長期療養病院は、寝たきりなどの心身障害のもっと重度な老人を介護するところで、全国に4万5千のベッド数を擁し、現在70歳以上人口の5%が入院している。長期療養病院は、州によって運営され、治療、リハビリテーションなどの役割を担っている。患者の中には、療養がき

わめて長期にわたる者が少なくないから、単に医療サービスの提供のみでなく家庭的な住み心地を感じさせる住居としての機能も果たさなければならない。このため、病院といえども個室の割合を多くしてゆくべきであるという指摘もなされている〔3〕。

第3に、特別サービスと呼ばれるものに、老人のための輸送サービス、サービス・バス (ホーム・ヘルパーの同乗する巡回サービス)、および郵便配達員によるソーシャル・サービスがある。とりわけ郵便配達員のソーシャル・サービスは、地方の在宅老人のためのユニークな試みであるから、ここで簡単に紹介しておきたい。

スウェーデンは、ヨーロッパの中でも4番目に広い国土をもっており、人口のまばらに点在している地域もかなりある。そのような地域においては、在宅老人への自治体のサービスは距離の遠さから届きにくいところがある。しかしながら、スウェーデンにおいても、老人はできる限り自宅で生活し続けたいと望んでおり、実際、図1に示されるように、80歳までは90%以上、80~85歳でも80%までが自宅で生活している。そこで、住居のまばらに散在する農村地帯においては、車で移動郵便局として巡回する郵便局員 (Rural Postmen) に、郵便業務に加えて他のソーシャル・サービスも引き受けてもらえないだろうかというアイデアが生まれた。そして、1974年には、郵便局と厚生省の間に合意が成立し、地方の郵便局員は、その郵便配達ルートに住む老人につきのようなサービスを行うことになった。すなわち、老住民が何ら

図1 スウェーデンの老人の住居形態



資料出所：Spri, "Några fakta om den svenska hälso-och sjukvården 81/82"

かの助けを必要としていないかどうかを確かめたり (contact service), 老住民が商店に注文しておいた物品の配達 (goods delivery) を行ったり, 自治体からのリクエストにより特定の老人 (たいていはひとり暮らし老人) を家庭訪問 (home visits) したりするサービスである。これらのサービス費用は, 自治体から郵便局に支払われる。現在約 90 の自治体 (全自治体の 1/3) がこの新しいサービスについて郵便局と合意に達しており, その結果, この特別サービスは, 全国約 25 万世帯をカバーしていると推定されている (2)。

このように, スウェーデンの老人福祉サービスは, 質と量の両面においてきめ細かく行き届くことを目指しているが, その目的達成には, 実に効率のよい方法を見い出して実施していることも見逃してはならないであろう。

つぎに, 最近のスウェーデンの老人福祉サービスの具体的な状況について, リディンイエ市のケースを例にとり, おもに老人ホームとサービス・ハウスを中心に紹介してみよう。

## 2 リディンイエ市の老人福祉サービス

## ① リディンイエ市の概観

スウェーデンの首都ストックホルムの中心から東へ5マイル、運河のような入江ひとつ隔てた緑の島が、リディンイエ市である。森や湖の自然が豊富に保存された18.6平方マイルの土地に、現在約4万人の市民が住んでいる。一戸建ての家に住んでいるのは33%で、残りはフラット(アパート)に居住している。筆者は、このリディンイエ市内でもストックホルム市に最も近い入江沿いのホテルに1週間宿泊したが、あたりはメイプルなどの大きな樹木の間に高級住宅地が散在する、静かな住環境の良いところであった。経済活動も活発で、市内で働く者は約1万人、そのうち自治体勤務の公務員が28%を占めるが、製造業に26%、商業に15%、建設業に10%、金融業に10%働いている。つまり、農業地域ではなく、自然環境を保持した小都市といえる。またレジャー活動も盛んで、とくに戸外のスポーツ、レクリエーションには、地理的にも恵まれている。たとえば、散歩、バイセクリング、クロスカントリー・スキーのための2マイルのルートあり、ゴルフコースあり、各種の球技場あり、という具合である。

話しは少々横道にそれるが、リディンイエ市は、彫刻家カール・ミレス(Carl Milles)の生地として有名である。ミレス・ガーデンという彫刻庭園を訪れると、彼の作品がヴェルタン入江を見下ろして展示されている。どの彫刻にも人間の生きる力強さと喜びがあふれているが、筆者にと

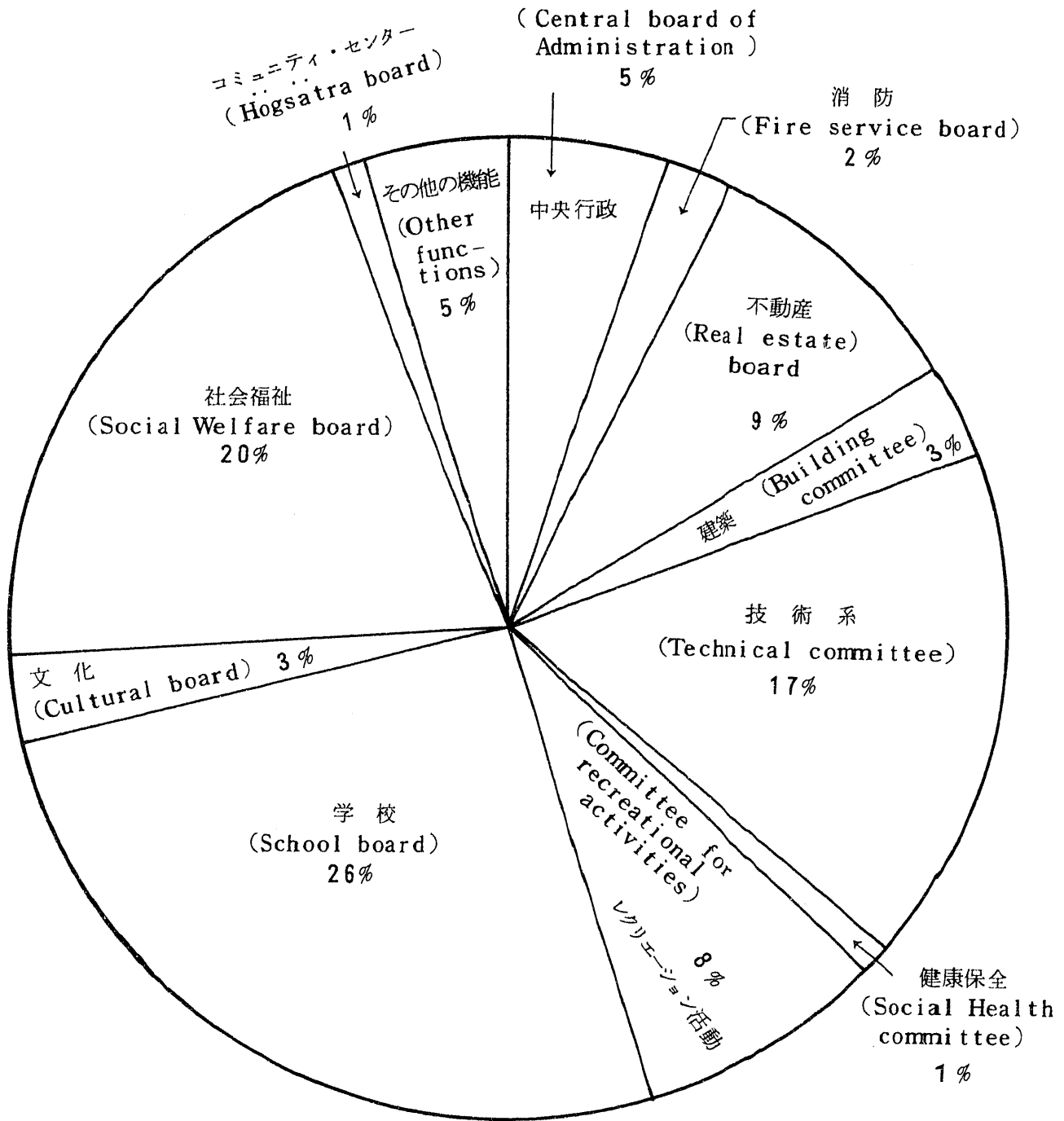
って最も印象深かった作品は、「天使の楽隊」(Angel Musicians)である。数人の天使が、空中で思い思いのポーズでラッパを吹いたり、フルートを奏でたりしている彫刻群である。それらは、まさに天使のような心の暖かさと本当の自由(freedom)を全く同時に感じさせるものであった。そしてこの芸術こそが福祉社会スウェーデンの人々の根本にある精神ではないかと、目が覚めるような思いをしたものである。

さて、リディンイエ市の老人福祉施設を見学する前に、それが市の財政の中でどのような位置を占めているかを、参考のために、つぎに簡単に触れておく。

## ② リディンイエ市の財政支出配分

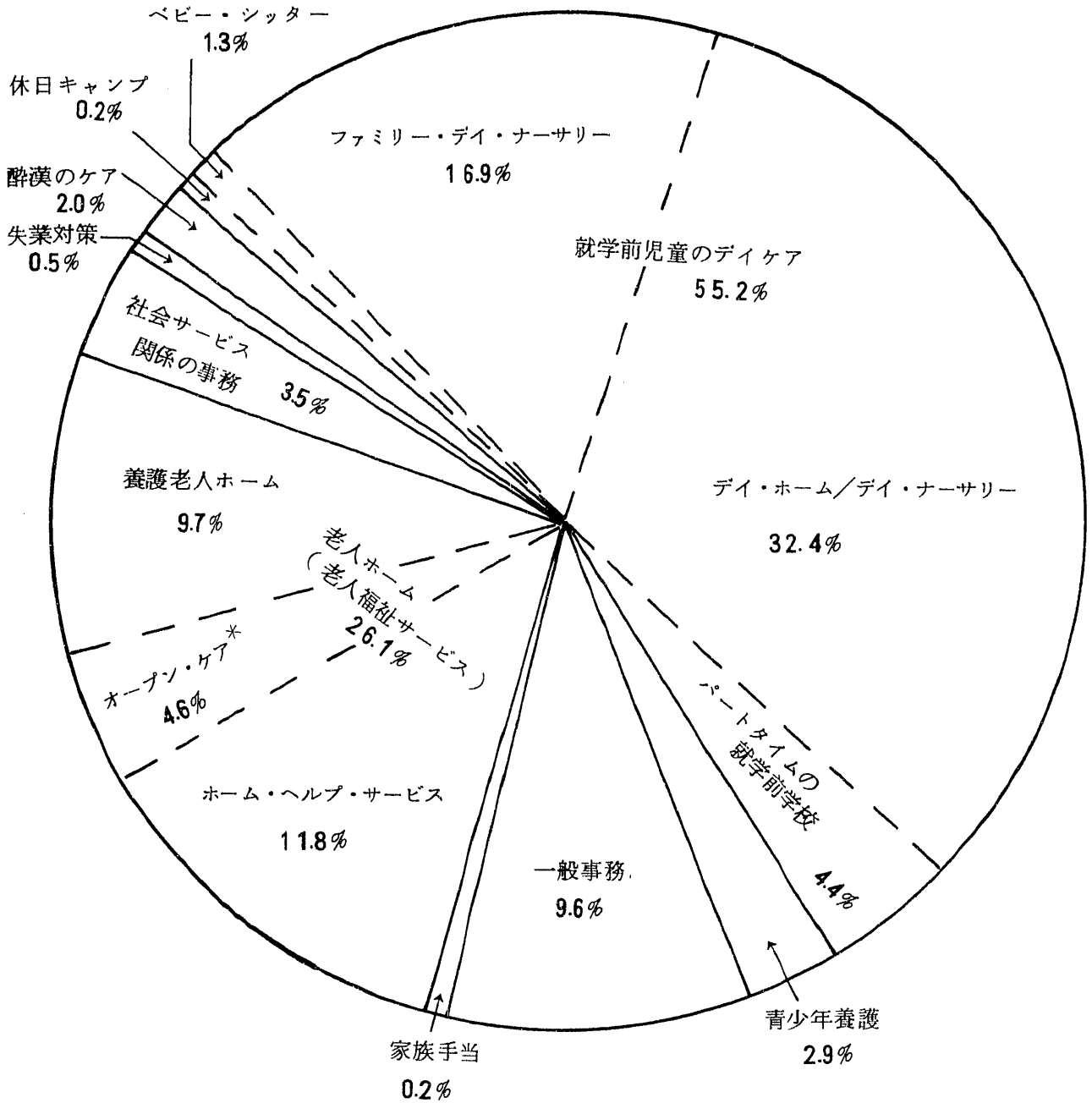
市の自治体の活動状況は、統計が少し古くなるが1978年の財政支出の内訳をみると、大方の見当がつくであろう〔図2〕。支出総額2億クローナのうち最も大きな割合を占めるのは、学校教育の26%で、社会福祉の20%がこれに続いている。このうち、社会福祉関係の支出は、図3のように各種のサービスに分けられる。すなわち市の社会福祉支出の55%が幼児養護に、26%が老人福祉サービスに充てられている。就学前の幼児(7歳未満)への保育サービス提供に、市当局が相当な力を注いでいる背景には、職業をもつ女性が増え、また夫から自立する妻が増えてきたことがある。すなわち、両親が働いている間の子供の保育が必要とされ、また、夫婦当り子供数の減少は、子供のグループ・コンタクト

図2 リディンイエ市の財政支出(1978年)



資料出所：リディンイエ市

図3 リディンイエ市の社会福祉サービス支出（1981年）



\*オープンケア：ペディキュア・サービス  
理髪  
食事サービス  
作業活動  
電話サービス  
入浴  
メンタル・トレーニング

資料出所：リディンイエ市社会福祉局

の必要性を増しているからである。

老人福祉サービスの財政支出は、その45%をホームヘルプ・サービスに、37%を養護老人ホームに、残りの18%を給食、入浴サービスから心身訓練や余暇活動まで含むいわゆるオープン・ケアの費用に充てられている。リディンイエ市におけるおもな老人福祉施設としては、養護老人ホーム“Siggebogården”とサービス・ハウスがあるが、前者の方が入居者の介護の性質からいってもより制度的に運営されている。人口4万のリディンイエ市は、現在、サービス・ハウスを2つもっているが、さらに2つ建設する計画である。ただし、やたらに増やそうという計画はなく、一般の住宅やビルの建設も、過密とならないように、自治体はその数を規制している。この社会では、住み心地のよい環境をつくるのがすべて、社会保障の対象に含まれて考えられている。

### ③ 養護老人ホーム - Siggebogården

リディンイエ市の養護老人ホーム“Siggebogården”は、市のOT課(Occupational Therapy Department - 作業療法課)に所属する施設で、市庁舎のすぐ裏手のなだらかな丘の上に、林の緑に囲まれてゆったりと建てられている。この老人ホームは、1964年に設立され、入居対象者は、リディンイエ市在住の65歳以上の市民で、OT課のカウンセラーによって養護が必要と認められた者に限られる。すなわち、寝たきりではなく、少なくとも自

分自身で起床し服を着ることができると、日常生活に介助を必要とする老人である。現在、入居者数は117名で、平均年齢87歳である。このうち20名が、惚けなどメンタルな問題の深刻な者である。

5階建てのホームの建物は、A、B、C、Dの4つのブロックに分けられ、それらは廊下で相互に連結されている。各階のエレベーターを降りると、廊下の壁に掛けられた“Välkommen”(歓迎)というカラフルな壁掛けがすぐ目にはいる。入居者は、シャワーおよびアラーム装置付きの個室に住み、3食の食事サービスを受けるので自炊の必要がない。ブロックごとに分散された小じんまりとしたダイニング・ルームは、普通の住宅のダイニング・ルームをほんのひと回り大きくしただけの、きわめて家庭的な雰囲気のある部屋で、北欧のインテリア・デザインの美しさが印象的である。「施設」であることを感じさせないのである。小じんまりとした読書室、TV室、談話室などにも、落ち着いた感じの家具が備わり、窓にはしゃれたカーテンが掛けられ、窓辺やコーナーに置かれた鉢植の花や観葉植物は利用者の心をなごませている。

このホームでは、常時平均して約30名の職員が働いている。しかしながら、ここで入居者の介護や機能訓練を担当するOT課の専任スタッフは6名だけで、その内訳は、フルタイムのスタッフ1名、パートタイムのアシスタント1名、教員(工芸などの)4名となっている。介護サービスは、実際には、ホーム・ヘルパー、アシスタント、地域看護婦、理学療法士、および作業

療法士から成るワーキング・チームが密接な連絡をとりながら行なっている。医師は週1回、回診にやって来る。このように比較的少人数のスタッフによって、行き届いたサービスが行なわれている。それを可能にしている理由は、少なくともつぎの2点にあるといえよう。第1に、職員が常時会合をもち、入居者の問題に適正にかつ効率よく解決できるように対応していること。具体的には、OT課のスタッフは2週間に1回、ワーキング・チームは月1回、その他職員（ペルソネル）は3週間に1回、それぞれミーティングを開く。さらに、その他職員は月に1回療法士と週に2回看護婦と、定期的にそれぞれ会合をもち、入居者の日常の行動について気付いたことや困ったことを報告する、という具合である。第2に、新しく開発された技術を導入していることである。たとえば、各フラットにアラーム・ボタンを備えるのみでなく、アラーム・ウォッチも利用している。このように効率アップによって、スタッフやその他職員の負担をミニマムにしようという努力がなされている。

入居者への各種の訓練は、週間プログラムに基いて実施される。このプログラムは夏用と冬用とで多少内容が異なるが、ここでは冬期プログラムを紹介しておこう。

このように行き届いたサービスを受ける居住者の費用負担は、各自の所得（すなわち支払い能力）に依存して決められるので、個人によってまちまちであるが、平均して月3,000クローナ（約10万円）くらいである。彼らは年金生活者であるから、受

給した年金からこの老人ホームの費用を支払うわけである。

冬期プログラム

	午前(10:00-12:00)	午後(13:00-16:00)
月	新聞読み・記憶訓練	音楽鑑賞
火	個々人に適した活動（散歩、音楽、種々のグループ活動、etc）	発声練習
水	体操、ダンス	
木	陶芸	手足の訓練
金	自由行動（ライブ・ミュージック、スライド映写会等の催し物が行なわれることもある。）	

④ サービス・ハウス—Högsåtra

現在、リディンイエ市は、島の南部Larsberg と Högsåtra の2箇所にて老人のためのサービス・ハウスを有し、各種のサービスを提供している。以下は、筆者の訪れた Högsåtra のサービス・ハウスの紹介である。

Högsåtra は、地域住民のサービス・センターであると同時に、老人のためのサービス・センターでもある、というリディンイエ市ご自慢のいわば教育・文化・福祉の総合センターの役割を果たしている広場のようなところである。ここのサービス・ハウスは、3棟に計172戸のアパートを有している。1戸当りの部屋数は1DKから3DKまでの3種類である。各々のアパート



には、もちろん、アラーム装置やサービス電話が備わっていて、レセプションの中央管理室に連結されている。入居者はこのアパートを契約で賃借りする。必要な場合は、ホームヘルパーが洗濯、掃除等の助けをしてくれる。また、Högsåtraに隣接した病院で診療を受けることもできる。サービス・ハウスと病院とは機能的に連結している。たとえば病院を退院した老人が、このHögsåtraのリハビリテーション・フラットにやって来て3ヶ月訓練を受けることもある。あるいは、ここで1週間リハビリテーションを試みて、その老人自身が日常生活をまだひとりでやってゆけないと判断されると、再び病院に送りもどされる、という具合である。

レセプションでは、おもに一般的なインフォメーション、食券と訓練用具の販売、物品の集配、銀行や郵便局への使い走り、理髪の予約、等々のサービスが提供される。このレセプションの向い側には、居住者の社会活動や社交のための部屋があり、ダンス・パーティもできるくらい広いスペースを有している。レセプションのすぐ隣には、玉突き台やカラーTVも備わった小規模なカフェテリアが、窓側に面して配置されている。筆者が訪れたときも、玉突きに興じている人々やテーブルでコーヒーを飲みながらおしゃべりしている老人達の光景が目にとまったが、ここでは誰もが気軽に利用できる雰囲気を感じられる。Högsåtraは、スウェーデンにおける他の多くのサービス・ハウスと同様に、心身の訓練を行う作業療法サービスのみならず、居住者

が好きな趣味活動を自由にできるホビー・サービスも備えている。小さな読書室や談話室は、前述の養護老人ホームと同様に、インテリアの美しさと心地良さに感嘆させられるが、何よりも「施設」のイメージが全くないことに気づく。居住者は、もちろん、家族や友人の訪問をたびたび受ける。遠方から泊まりがけで会いに来る家族や友人のためには、特別のゲスト・ルームも用意されている。居住者と同じHögsåtraで宿泊できる便利さに加え、1泊35クローナ(約2,000円)というホテルよりも安いルーム・チャージが、彼らの訪問を一層容易なものにさせている。

ところで、スウェーデンのサービス・ハウスは、基本的な設備やサービスについてはどのサービス・ハウスも大差はないが、Högsåtraの特徴は、何と云っても老人と若者が世代を超えてコミュニケートできるオープンな広場をもっていることにある。まず、3棟のサービス・ハウスと並んで、就学前学校、基礎学校高学年校舎、低・中学年校舎、スポーツセンターの建物が広い敷地につづいている。そしてサービス・ハウスとこれらの建物の間に文化センターが位置して、それぞれ廊下で連結されている。文化センター内には、レストラン、音楽室、コミュニティセンター、陶芸ワークショップ、図書館、等々が備わり、学校の子供たちも老人たちも、自由に、いっしょに課外活動(あるいは趣味活動)を楽しむことができる。そこでは出会いがあり、相互に学び合い助け合うというコミュニティの思想に、このHögsåtraは根ざしているのであ

る。

### 3 今後の老人福祉サービスの方向

スウェーデンにおいて、サービス・ハウスが建て始められたのは、今から15年ほど前であるが、それ以前は、かなり多くの老人がいわゆる老人ホーム（Old age home）に住んでいた時期があった。それは、彼ら自身の住宅事情が悪かったことと、老人は施設にはいるのがよいという福祉の風潮があったことにも起因する。けれども、「施設」での生活は老人を孤立と孤独に追いやることにもなり、施設収容に対する強い批判と深い反省が次第に生まれるようになった。ほとんどの老人は、長年住み慣れた自分の家で暮し続けたいと願っている。それは、手の届くところに親類や近隣がいるという安心感（a sense of security）によるところが大きいからである。近年スウェーデンの老人福祉政策がホームヘルプ・サービスの拡充に力をいれてきたことは、施設型ケアから在宅型ケアへという福祉の流れの方向を示すものである。それでも高齢（とくに85歳以上）になるにしたがい、健康上の問題が深刻となり自宅で生活できない老人の割合は増えてくる。自宅での生活が困難な老人のためには、ケア付きの住居が用意されなければならない。そのような住居も、彼らの住み慣れた住環境にできるだけ近いものが求められている。本稿に紹介された養護老人ホームおよびサービス・ハウスは、そのような住居の一例といえる。

近年のスウェーデンの老人福祉サービス

は、前節で触れたように、経済的配慮のみならず心理的配慮の努力が積極的になされている。とはいえ、専門家の間では、老人の嗜好とニードはまだまだ充足されていないという指摘がなされている。そして、より多くの老人が、彼らの地域で、よりノーマルな自立した生活を送れるように、福祉政策への提言の筆頭に、「老人が普通の住居で生活できる可能性を増大させること」を挙げている〔3〕。実際に、このようなニードに基づく市民運動も行なわれている。たとえば、筆者がストックホルム滞在中に訪問した年金者全国組織（PRO）では、建築家や借家人組合などの代表と共に、市民による住宅顧問委員会を組織し、老人家庭の住居の改善や老若両世代がコミュニケーションできるような住宅地域づくりに、とり組んでいる。彼らは、一般住宅に特別の設備をつけるならば、身体にある程度のハンディキャップをもっている老人ホームに移る必要はないというケースがずいぶんある、と考えている。

このようにスウェーデンの老人福祉サービスは、今後も、「施設」方式から在宅型ケアへの移行を促進する方向にあり、それはコミュニティの中の、市民に開かれた福祉として根づいてゆくことを、ここでは意味している。今後、高齢人口の増加に伴い、老人福祉サービスの需要はますます増大する見込みである。そのための費用をミニマムにするために、ホームヘルパーの待遇改善と再組織化、技術革新、設備の改善などによるサービスの効率化が課題とされている。さらにつけ加えるならば、老人の健康

保持のための社会参加，とくにヤング・オールド（60歳代？）に生きがいのある職業を！という新しい政策の方向が注目されるところである。

### おわりに

スウェーデンはすでに高齢社会にあるとはいえ，65歳以上人口は日本のその13%にすぎない。言い代えるならば，日本の高齢人口は，比率こそ9.05%（1980年）とスウェーデンにはおよばないが，絶対数では1,057万人に達しており，これはスウェーデンの全人口をさらに上まわる人数である。そして日本においても，人々の生活様式や価値観が変化してゆく中で，老人福祉サービスに対する需要は増大する一方である。経済大国となった今日，福祉先進国から学ぶものは大きいと言わざるを得ない。

以上のレポートにおいて，筆者の個人的印象談の挿入および情報の散漫さはお許しいただき，この資料が，関心を寄せられる読者への多少の参考になれば幸いである。なお本稿の執筆にあたっては，スウェーデン訪問中にお会いした関係者のうち，とくにNational board of health and welfareのMs. T.V. Sydow，リディンイエ市社会福祉局長のMr. A. Åberg，同OT課のMs. M. Barker，HögsåtraのMs. R. Manne，PRO（National Organization of Pensioners）のMr. S. Svedberg，Spri（Swedish planning and rationalization institute）のDr. K. Kogeus，そして訪問のプログラムをアレンジして下さったThe Swedish InstituteのMs. M. Jörnstedtのご協力を賜わった。これらの方々に，記して感謝の意を表したい。

---

### 〔参考資料〕

- 〔1〕 “Just another age”，A Swedish report to the World Assembly on Aging 1982.
- 〔2〕 The Swedish Post Office and The Swedish Board of Health and Welfare，“Rural postmen in Sweden help to provide Social Services”
- 〔3〕 Spri，“Primary Care and Care for the Elderly”